

大阪狭山市文化財報告書16

**大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書 8**



1998年3月

大阪狭山市教育委員会

大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書 8

1998年3月

大阪狭山市教育委員会

序 文

大阪狭山市内には、府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして、多くの文化財があります。

大阪狭山市教育委員会では、平成2年度より継続して行なっております個人住宅建設に先立つ発掘調査を、本年度も国と大阪府の補助金を受けて実施することができました。

本年度はとくに、狭山藩陣屋跡内における個人住宅建て替えの増加をみたため、狭山藩陣屋跡での発掘調査を主として行い、貴重な成果を得ることができました。本報告書はこれらの調査結果をまとめたものです。本書がわずかでも各分野における研究の一助となれば、まさに望外の喜びです。

本年度の調査におきましては、建築主の皆様ならびに調査地周辺の皆様に多くのご協力を賜りました。厚く感謝申し上げます。また、今後とも文化財保護に対する御理解と御支援のほどを、よろしくお願ひ申し上げます。

平成10年3月

大阪狭山市教育委員会

教育長 岡 本 修 一

例　　言

1. 本書は国庫および府費の補助を受け、大阪狭山市教育委員会が平成9年度国庫・府費補助事業として大阪狭山市内で実施した、個人住宅等建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査の成果を主として掲載した概要報告書である。
2. 収録した各調査は以下の通りである。

　1. 狹山藩陣屋跡　：97-1区・97-2区・97-3区・97-4区
　　97-5区・97-6区

　現地調査は、大阪狭山市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課 市川秀之と同 植田隆司が担当した。

3. 現地調査に当たっては、中原忠明・浦壁 見をはじめとする諸氏の協力を得た。遺構・遺物の整理作業は調査担当者の他、植山てる江・五福實幸・中尾美津江が主としてこれをを行い、また、橋本和美・山崎和子・笠岡裕里子・若宮美佐・矢田直樹をはじめとする諸氏の協力を得た。

　遺構・遺物の写真撮影は担当者が行なった。

　なお、笠原家の建築調査については、谷直樹氏（大阪市立大学）・植松清志氏（大阪府立西野田工業高校）のご指導のもと、下記の方々の協力を得た。今井敬子・西尾幸希子・平峯光代・野村知世・野口奈美・大熊アイ子・尾崎田鶴子・茂呂大輔・神野茂・小山将史・上田公次・浦部弘紀・千森督子(順不同・敬称略)

　また、笠原家の建築調査における写真撮影は、京極寛氏に依頼して実施した。

4. 本書の執筆・編集は、市川と植田が分担しておこなった。

本文目次

(頁)

序 文	大阪狭山市教育委員会教育長 岡本修一
例 言	
はじめに	1
1. 狹山藩陣屋跡	97—1 区 3
	97—2 区 5
	97—3 区 7
	97—4 区 9
	97—5 区 14
	97—6 区 22

挿 図 目 次

第1図	大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布 2
第2図	狭山藩陣屋跡調査区位置図 4
第3図	狭山藩陣屋跡97—1区遺構平断面図 4
第4図	狭山藩陣屋跡97—2区遺構平断面図 6
第5図	狭山藩陣屋跡97—3区土層断面図 8
第6図	狭山藩陣屋跡97—4区遺構平断面図 10
第7図	狭山藩陣屋跡97—4区土坑平断面図 11
第8図	狭山藩陣屋跡97—4区瓦質土管付近平面図 11
第9図	狭山藩陣屋跡97—4区遺構平面図(部分) 12
第10図	狭山藩陣屋跡97—4区土師皿出土状況 13
第11図	狭山藩陣屋跡97—4区試掘溝土層断面図 13
第12図	笠原家住宅屋根伏せ図 15
第13図	笠原家住宅間取り図 16
第14図	笠原家住宅立面図(正面・東から) 17
第15図	笠原家住宅立面図(南から) 18
第16図	笠原家住宅断面図(東西方向) 19
第17図	笠原家住宅長屋門 柱間図・立面図・断面図 20
第18図	狭山藩陣屋跡97—5区遺構平断面図 21
第19図	狭山藩陣屋跡97—6区遺構平断面図 23

図版目次

- 図版1 上空からのぞむ狭山藩陣屋跡
図版2 狹山藩陣屋跡上屋敷図
図版3 狹山藩陣屋跡下屋敷図
図版4 狹山藩陣屋跡97—1区
図版5 狹山藩陣屋跡97—2区
図版6 狹山藩陣屋跡97—2区
図版7 狹山藩陣屋跡97—3区
図版8 狹山藩陣屋跡97—4区試掘
図版9 狹山藩陣屋跡97—4区
図版10 狹山藩陣屋跡97—4区
図版11 狹山藩陣屋跡97—4区
図版12 狹山藩陣屋跡97—5区建造物調査（1）
図版13 狹山藩陣屋跡97—5区建造物調査（2）
図版14 狹山藩陣屋跡97—5区建造物調査（3）
図版15 狹山藩陣屋跡97—5区発掘調査
図版16 狹山藩陣屋跡97—6区
図版17 狹山藩陣屋跡97—6区
図版18 狹山藩陣屋跡97—6区
図版19 狹山藩陣屋跡97—1区出土遺物（1）
図版20 狹山藩陣屋跡97—2区出土遺物（1）
図版21 狹山藩陣屋跡97—2区出土遺物（2）
図版22 狹山藩陣屋跡97—2区出土遺物（3）
図版23 狹山藩陣屋跡97—4区出土遺物（1）
図版24 狹山藩陣屋跡97—4区出土遺物（2）
図版25 狹山藩陣屋跡97—4区出土遺物（3）
図版26 狹山藩陣屋跡97—4区出土遺物（4）・97—5区出土遺物
図版27 狹山藩陣屋跡97—6区出土遺物（1）
図版28 狹山藩陣屋跡97—6区出土遺物（2）
図版29 狹山藩陣屋跡97—6区出土遺物（3）
図版30 狹山藩陣屋跡97—6区出土遺物（4）

はじめに

大阪狭山市は、ベッドタウン化された昭和40年代以降に急激な人口増加をみた。近年においては、その頃の勢いは無いとはいっても、住宅開発は引き続き盛んである。また、その頃に建設された木造住宅の建替えや増改築が行われる時期にさしかかっていることもあり、これらに伴う埋蔵文化財の発掘届の提出件数にもほとんど減少の兆しあり得ない。この傾向は今後も持続するものと考えられる。

本報告書においては、本年度に大阪狭山市教育委員会が実施した、市内における個人住宅建設等に伴う発掘調査の成果を報告する。ただし、狭山ニュータウンなど既に大規模な造成工事が行われた箇所における住宅の新築・増改築に際しては、本市教育委員会は立会調査を行い、これに対応している。立会調査を行なった結果、遺構・遺物が検出されなかった事例が多数あったが、これらについては報告を省略する。

ところで、大阪狭山市域の遺跡分布と地形分類は第1図の通りである。本市は読んで字のごとく、西側の泉北丘陵と東側の羽曳野丘陵に挟まれた地形で、この両丘陵の間に幾筋かの南北方向の谷筋が走っている。これらの谷筋から、旧石器時代・縄文時代の打製石器が幾度か採集されている¹⁾。

弥生時代の遺跡としては、市域南部の高地において、弥生時代後期の集落跡が検出された茱萸木遺跡がわずかに知られるのみである。

古墳時代前期についてもいままだ明らかでないことが多いが、狭山池北方の池尻遺跡において庄内期のものと思われる遺構が確認されているため、沖積面での遺跡の分布が予想される。

古墳時代中期になると、泉北丘陵を中心にその造営が展開された陶邑窯跡群が東方へとその域を拡大した結果、本市域西端に相当する陶器山丘陵とその東側の高位段丘の斜面に須恵器窯が数多く築かれた。古墳時代後期の6世紀中葉～後葉になると、陶邑窯跡群は、さらに東方へとその域を拡大し、本市域の至るところの中位段丘崖にも窯を築き、須恵器生産を行う。7世紀前葉～中葉になると、窯焼きの燃料である薪や窯を築く斜面が不足したようであり、西暦616年以後に土盛りが行われた狭山池の北堤²⁾の下流側斜面のような、窯を造営するには不適当な箇所にまで窯を築くようになる³⁾。

この狭山池が築かれた主谷の東西に広がる中位段丘面上に、東野廃寺・池尻城跡・庄司庵遺跡・狭山神社遺跡・狭山藩陣屋跡などの古代・中世・近世の諸遺跡が立地している。

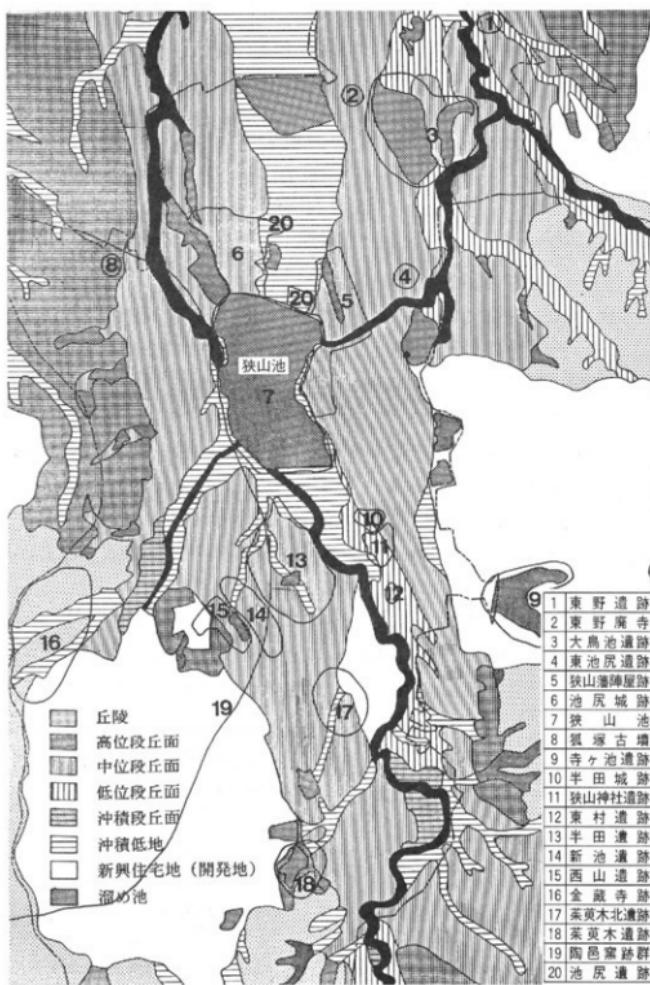
註記

1) 西野良政氏・上野正和氏・西岡勝彦氏の採集資料などがある。

上野正和「狭山の考古学研究と私」『さやま誌 大阪狭山市文化財紀要』創刊号、1992

2) 1994年～1995年の調査で東堤下層遺構が検出され、奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏の調査により、その材に用いられているコウヤマキの伐採年代がA.D.616年と判明した。この東堤は、狭山池を堰止める北堤の最下層の盛土によって埋設されている。ゆえに、狭山池築造当初の堤と考えられる最下層の盛土はA.D.616年以後に施工されたものと判断される。

3) 狹山池調査事務所「狭山池調査事務所平成5年度調査報告書」1994年



第1図 大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布図

1. 狹山藩陣屋跡

狹山藩陣屋跡は、狹山池東側の中位段丘面上に立地している近世の城館跡である。豊臣秀吉によって小田原城を落とされた戦国大名北条氏の末裔が、近世初期にこの地に陣屋を開き、以後明治維新にいたるまでの間、一貫して陣屋が営まれていた。

明治以降、狹山藩陣屋跡域内における景観は大きく変し、現在ではほぼ全体が住宅地となっている。現在では、既存住宅の建替えや、小規模な再開発がほぼコンスタントに実施されているため、陣屋跡域内における埋蔵文化財発掘調査件数は減少の兆しをみせない。また、来年度からは、府道美原狹山線の歩道設置に伴う拡幅工事が、陣屋跡の域内において本格化するため、これに先だって家を建て替えるケースが増加している。本書で報告をおこなっている調査の多くも、こうした開発に伴うものである。

今後数年の間に、府道の東西における発掘調査件数が激増するものと予測されるが、これらの調査成果によって、近世後期に狹山藩陣屋跡上屋敷の中心を南北に貫く大手筋のようすと、その両側の屋敷配置等が明らかにされることであろう。

本書にて報告をおこなっている本年度の調査位置は、第2図のとおりである。

狹山藩陣屋跡97—1区

狹山藩陣屋跡97—1区は、大阪狭山市狹山四丁目2449番地9号に所在する。明治初期の屋敷配置を描いている『狹山藩陣屋跡上屋敷図』では、「牧山」と記された屋敷地の一部に相当するものと思われる。調査は、用地のほぼ中央で南北5.3m・東西1.0mの調査区を設定して、平成9年8月に実施した。

(1) 遺構と層序

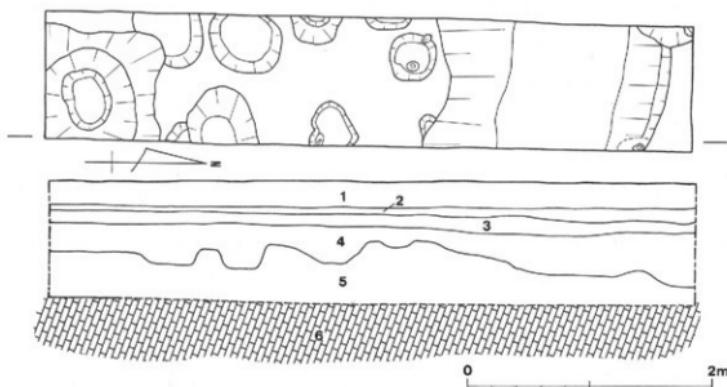
土層断面を観察すると、既存していた住宅にともなう整地層の厚さは20cmで、その下層に旧表土層の暗灰色砂質土層、黄灰色砂質土層、灰黄色砂質土層、遺構ベースとなっている淡黄色砂質土層がある。遺構は、地表下約50cmの淡黄色砂質土層上面から掘り込まれており、径60cm以下のピットが11、径1.2m以上の土坑が1、調査区北端付近で東西にのびる溝1条である。溝は最大幅180cm・深さ20cmを測る。

(2) 遺物

この調査区出土の遺物はそれほど多くはなく、主として飲食器、調理具などの生活用品が出土している。全体としては肥前系磁器が多い。図版19—1、—2はいずれも肥前系磁器、1は小皿、2は椀。また図版19—3は焰烙。約半分が残存している。内面、底面ともススが真っ黒に付着している。4は陶器の大鉢。産地は瀬戸美濃系。底部のみ残存している。外部には線刻、縄目などで文様が刻まれ、その上から灰釉を施している。いずれも近世後期の製品である。



第2図 狹山藩陣屋跡調査区位置図



- | | | |
|-----------|--------------|--------------|
| 1. 整地層 | 2. 旧表土暗灰色砂質土 | 3. 黄灰色砂質土 |
| 4. 灰黄色砂質土 | 5. 淡黄色粘土 | 6. 灰色粘土 (地山) |

第3図 狹山藩陣屋跡97-1区遺構断面図

狹山藩陣屋跡97—2区

狹山藩陣屋跡97—2区は、大阪狭山市狹山四丁目2442・2435に所在する。『狹山藩陣屋跡上屋敷図』では、「南御山」と記された箇所に相当し、大手筋の南端にある「南表門」に隣接する。「門番」と記された箇所を含むか、もしくはその北隣の角地に相当する可能性があろう。

調査は、用地の中央で第4図のように、南北6.0m・東西10.5mの調査区を設定して、平成9年8月・9月に実施した。

(1) 遺構と層序

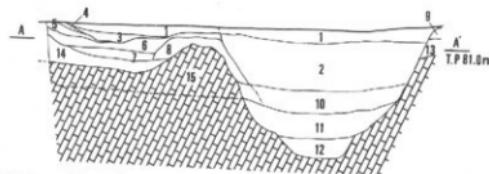
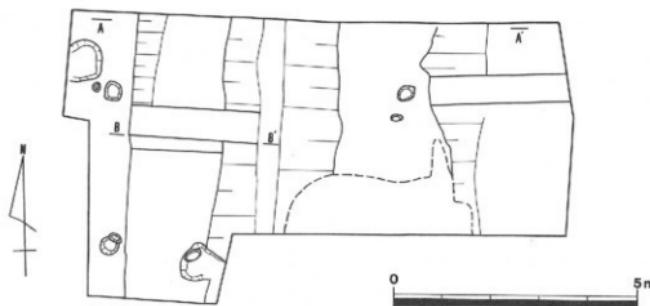
調査区内における攪乱が広範囲におよんでいたため、各遺構の切り合い関係を確認することが困難であるが、当該調査区の遺構は概ね次のように確認できる。

調査区西端では、地表下約20cmであらわれる灰黄色砂質土層上面から掘り込む遺構、ピット6個が確認できる。この面の一部は東側へ浅く落ち込み、調査区西端から東へ約3mのところで深く落ち込み、調査区を南北に貫く断面V字形の大溝の肩を成している。この大溝の上端幅は220cm、深さは130cmを測る。この大溝の肩は数次にわたって補修されている可能性があり、淡黄褐色シルト層や地山となっている明灰黄色砂質土層からの掘り込みも確認できる。

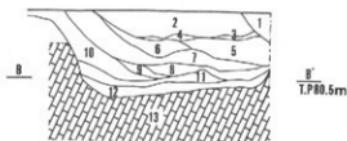
また、調査区西端から東へ7.5mの箇所でも深い掘り込みが確認された。掘り込み面は大溝と同じ、灰黄色砂質土層上面である。深さは約80cmを測る。この遺構の東側の肩は、調査区外に位置したために確認できなかったが、その下端が調査区端でかろうじて検出できた。これから推定される掘り込みの幅は約250cmである。掘り込みの底は平坦。遺構の平面形は不明であるが、V字形大溝と関連した遺構と考えるのが妥当であろう。

出土遺物は、V字形大溝の底付近から若干の陶器片が出土し、調査区東端の掘り込み底付近では、褐色砂質土・黃灰色砂質土・灰色砂礫土・灰色粘土・明灰色粘土の各埋土中より多量の瓦が出土した。北條氏の紋である三鱗紋の軒丸瓦や巴紋の軒丸瓦を含んでおり、ある時期に一括してこの掘り込みの中へ投棄されたような感を受ける。

当該調査区で検出された大型の遺構は、その出土遺物に瓦を多量に含んでいることと、当該調査区が「南表門」付近に位置していることから、狹山藩陣屋跡上屋敷の堀やそれに類した遺構である可能性が高い。



- | | | |
|-----------------|-------------------|------------------|
| 1. 淡褐色シルト(整地層) | 6. 淡黄色砂質土 | 11. 明灰色粘土(遺物包含層) |
| 2. 黄褐色砂質土(礫まじり) | 7. 黄褐色砂質土 | 12. 明灰青色粘土(同上) |
| 3. 褐色礫砂土 | 8. 淡黄褐色シルト | 13. 灰黄色砂質土 |
| 4. 淡褐色シルト | 9. 黄褐色砂質土 | 14. 灰黄色砂質土 |
| 5. 淡黄灰色砂質土 | 10. 淡灰褐色粘土(遺物包含層) | 15. 明灰黄色砂質土 |



- | | | |
|------------------------------|------------------|-----------------|
| 1. 整地層 | 6. 淡褐色砂質土 | 11. 灰色粘土(遺物を包含) |
| 2. 淡灰褐色シルト
(擾乱シルトのブロックあり) | 7. 淡黄灰色砂質土 | 12. 明灰色粘土(同上) |
| 3. 灰褐色砂質土 | 8. 褐灰色砂質土(遺物を包含) | 13. 明灰黄色砂質土 |
| 4. 灰褐色砂質土 | 9. 黄灰色砂質土(同上) | |
| 5. 淡黄灰色シルト | 10. 灰色砂礫土(同上) | |



第4図 狹山藩陣屋跡97—2区遺構平面図

(2) 遺 物

この調査区の出土遺物は巻末の図版20、21、22に掲載した。

図版20—1は磁器製の急須。図版19—2、—3、—4はいずれも磁器であるが、2の皿だけは中国製のものである可能性がある。3、4は椀で、産地は肥前。図版19—5は陶器の椀。6はやはり陶器の土鍋。把手が片方残存している。

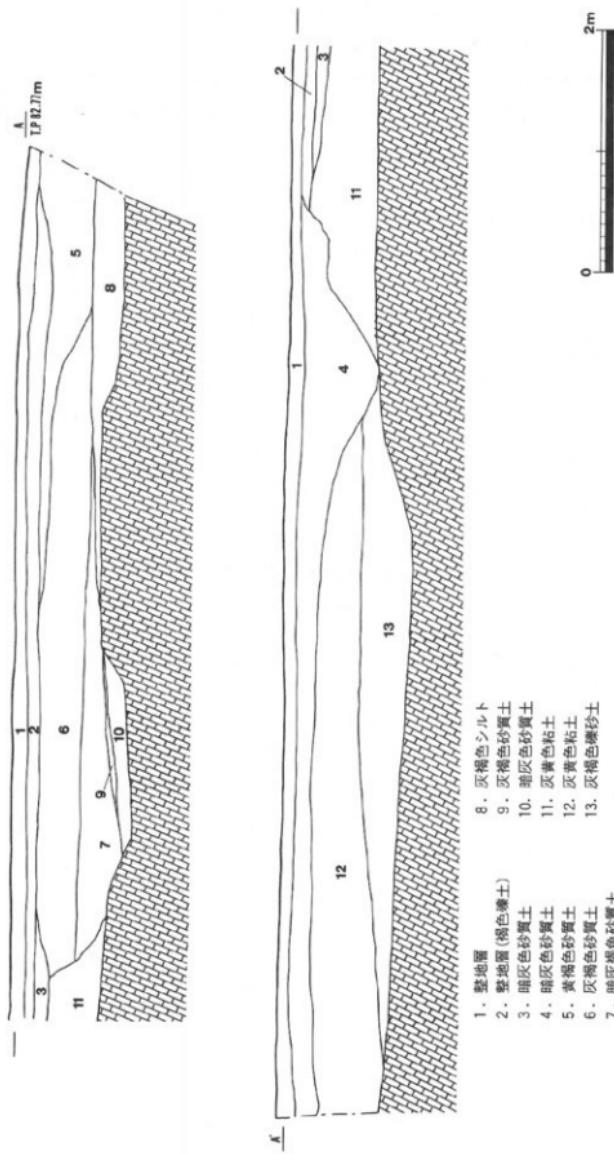
図版21—7、—8、—9はいずれも軒丸瓦。北条家は戦国時代には始祖早雲以後5代にわたって、関東地方を代表する戦国大名として栄えたが、秀吉の小田原攻めによって滅び、その後江戸時代に入ってから狭山で陣屋を構えるに至った。小田原時代の北条家の家紋は三鱗紋であることが知られている。当時の家紋は正三角形であるが、近世以後は遠慮して二等辺三角形を三つ重ねた三鱗紋としたことが『狭山町史』などに記されている。しかしながら出土する軒丸瓦の三鱗紋は大半が正三角形のものであり、今回出土したものもすべて正三角形のものである。図版21—10は巴紋の軒丸瓦。狭山藩陣屋上屋敷の南門は享保期に作成された「狭山池惣絵図」(田中家文書)などにも瓦葺きの門として描かれている。今回出土した瓦は南門にほど近い堀状の遺構から出土したものであり、この南門に葺かれていたものである可能性が高い。

図版21—11は土師器の小皿。内面には無色の釉薬を施している。図版22—12は備前の摺鉢。—3も摺鉢であるが12よりもすこしだ大きい。産地は丹波か。13は堺産の土師質瓶。

狹山藩陣屋跡97—3区

狹山藩陣屋跡97—3区は、大阪狭山市狭山四丁目2435—2、2435—8、2437—3に所在する。『狭山藩陣屋跡上屋敷図』では、「南御山」と記された箇所の一角に相当し、狭山藩陣屋跡上屋敷の南端に位置する。

調査は、南北18m・東西1.0mの調査区を設定して、平成9年9月・10月に実施した。結果、第5図に示すとおり、地表下約30cmまで整地層が続き、地山は若干の起伏が認められるものの、約100cmの深さで確認された。灰褐色系砂質土の各上面および地山面で遺構検出を試みるもの、明らかな遺構や遺物の包含は認められなかった。近接する97—2区では、大型の遺構が検出されているが、これとは対照的な状況である。



第5図 狹山陣屋跡97—3区土層断面図

狹山藩陣屋跡97—4区

狹山藩陣屋跡97—4区は、大阪狭山市狹山四丁目2443-4、2760-2に所在する。

『狹山藩陣屋跡上屋敷図』では、「植田」と記された屋敷地およびその西側の大手筋東半部に相当すると思われる。なお、当該調査区は97—2区の北隣に位置している。

調査は、南北約9m・東西約11mの調査区を設定して、平成9年9月・10月に実施した。

(1) 遺構と層序

発掘調査に先立って実施した試掘調査ではトレッジ掘削を実施し、断面の観察を行なったが、その結果、この地点では上下2層の遺構面が存在すること、上層から大きな南北方向の溝が掘削されており、下層遺構面はかなり搅乱をうけていることが想定された。発掘調査の結果、検出された層は予想とは反して1層のみであった。ただ大規模な溝や、投棄のための土坑が集中している箇所では部分的に上層遺構が検出されている。

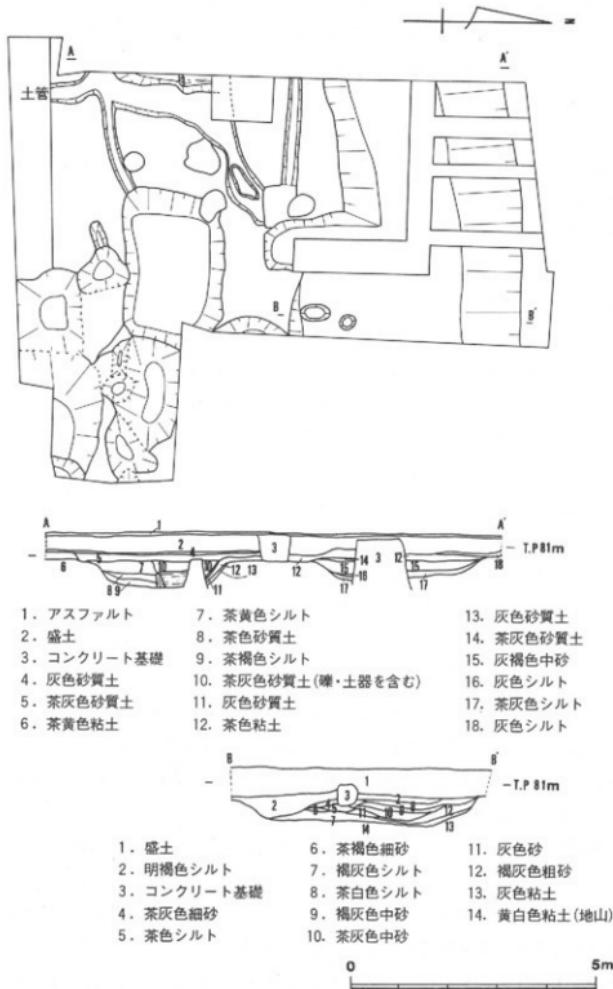
第6図に示したのは当調査区の平面図および断面図である。調査区の北側では幅3.8m、深さ0.8mという東西方向の大型の溝を検出した。この調査区のすぐ西側には、南北方向に府道美原河内長野線が通っている。この道は近世の狹山藩陣屋上屋敷の大手筋を継承した道であるが、今回検出された溝はこの道と直行する方向に走っている。この調査区付近には上屋敷の南を画する南門が存在したことが複数の絵図から想定できるが、東西方向の溝は門に連続する土塀とともに陣屋の南側の防衛線としての役割を担ったものである可能性が高い。また97—2区の調査では、この溝にちょうど直行する南北方向の大きな溝が検出されていることから門付近の溝は複雑に入り組み、樹型状の構造をもっていたことが想像できる。

この溝の北東隅からは第10図に示したように、土師皿が重なった状態で出土している。第9図下で示したのはこの溝が埋め立てられていく過程で土坑化した状況であるが、この埋め立て面の表面には黄色のよく縮まった粘土が丁寧に張られていた。

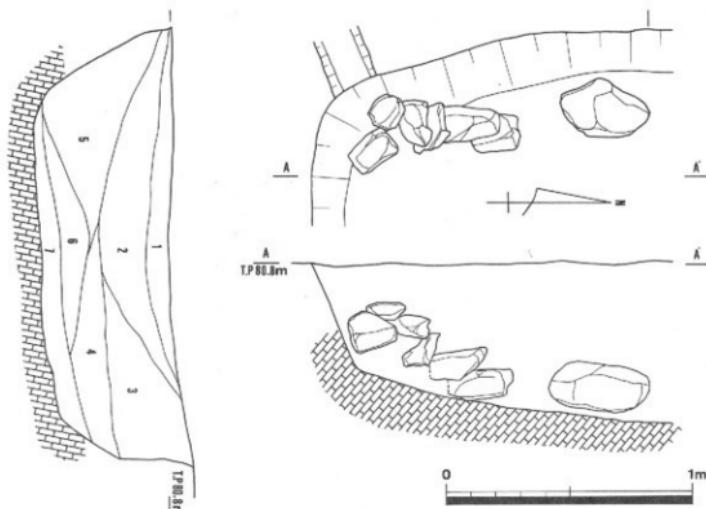
また、調査区の中央部においては南北2.0m、東西2.7mの長方形の土坑が検出された。この土坑はほぼ非常に急傾斜に掘削されており、南西隅には階段状に30cm程度の大きな石を階段状に積み重ねていた（第7図）。穴の中に入ってなんらかの作業を行なったことが推測できるが、明確にこの土坑の機能を確定することはできない。

また、調査区の南西隅においては瓦質の土管を南北方向に並べた暗渠が検出されている（第8図）。この瓦管は南接する敷地（狹山藩陣屋跡97—2区）では検出されていないが、少なくとも6本以上は連結し、北側の土坑につながっている。屋敷地内あるいは、この調査区のすぐの西側を走る大手筋の排水を目的にした暗渠であろう。

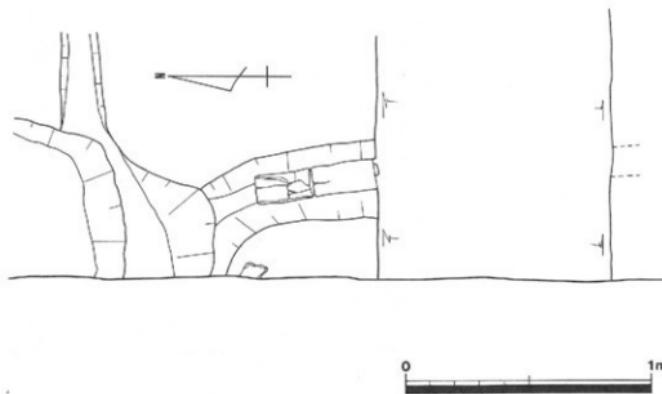
調査区の東南隅においては複雑に切り合った土坑群が検出されている。第6図に示したのは最終面における土坑の状態であるが、この上の層においても同様の長円形の土坑群が検出されている（第9図上）。これらの土坑はおそらくは廃棄物を埋めるためのものと考えられ、上下



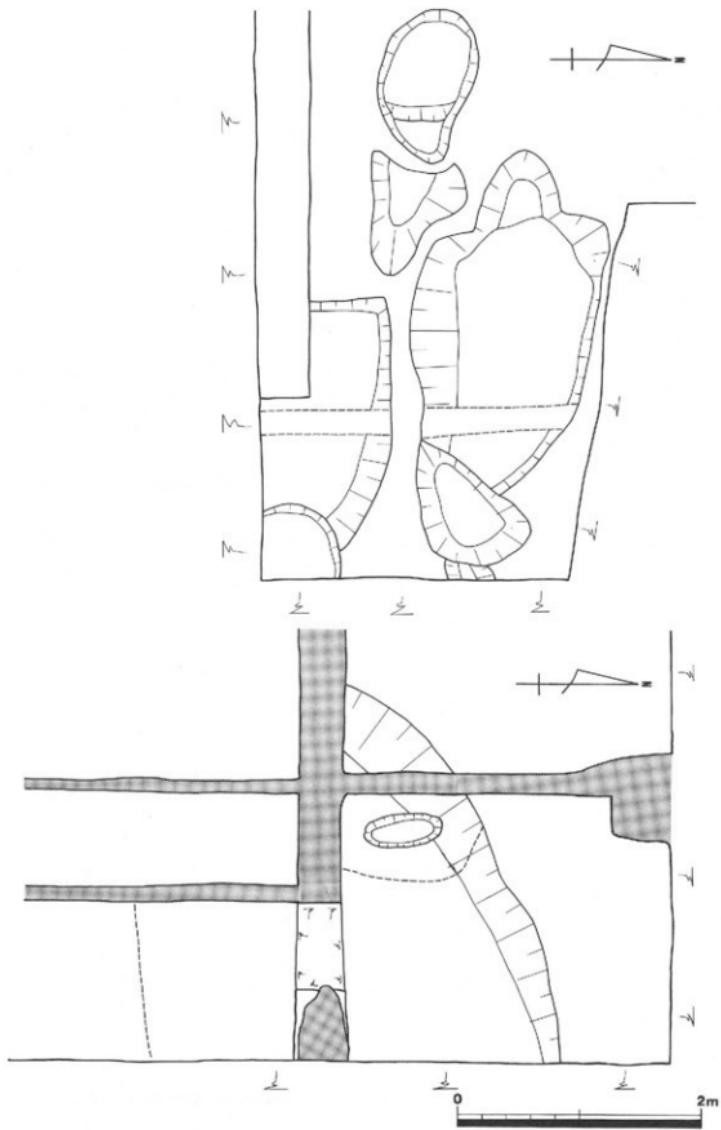
第6図 狹山藩陣屋跡97-4区遺構断面図



第7図 狹山藩陣屋跡97—4区土坑平面面図



第8図 狹山藩陣屋跡97—4区瓦質土管付近平面図



第9図 狹山藩陣屋跡97—4区遺構平面図(部分)

の2層もそれほどの時期差を持つものとは考えられない。

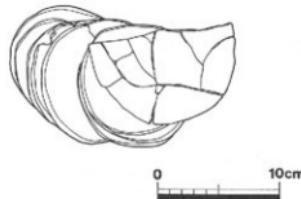
(2) 遺物

97—4区からは多くの遺物が出土している。これらの遺物は図版23・24・25・26に示した。図版23—1～5は調査区の南西隅の暗渠を構成した瓦質土管である。これらの土管はいずれも同じサイズであり、長さが37cm、直径が14.2cmであった。接続部はソケット式になつていて、隣接する土管の中に端部が入るようになっている。

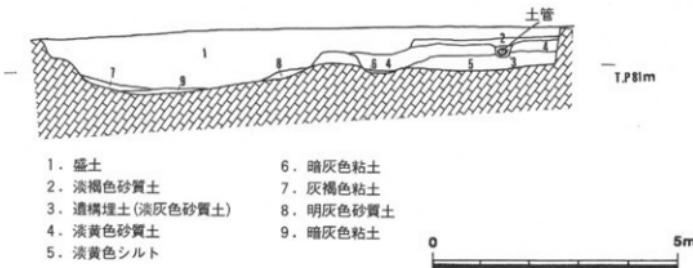
図版23—6～16はいずれも大溝のなかから出土した土師皿である。ともに完形に近い形で出土している。

図版24—18は焼塩壺。刻印などはみられない。19は青磁の皿で内面に草花文を陰刻する。20・21はともに瀬戸美濃系の茶碗で、20には鉄釉で草花を描く。22～28は椀。いずれも肥前系の磁器である。29は全面に黒色の釉を施した天目椀。30は摺鉢。内面の目は随分磨滅している。堺産。31も摺鉢であるが、産地は丹波。

遺物は全体的に近世後期のものを中心とする。他の調査区にくらべて土師皿の出土が多くみられたのが特色といえよう。



第10図 狹山藩陣屋跡97—4区土師皿出土状況



第11図 狹山藩陣屋跡97—4区試掘溝土層断面図

狹山藩陣屋跡97—5区

狹山藩陣屋跡97—5区は、大阪狭山市狹山三丁目2519—1に所在する。

『狹山藩陣屋跡上屋敷図』では、「笠原」家の屋敷地と記されており、発掘調査以前に現存していた笠原家住宅がこの絵図作成以前から存在していたことがわかる。この項では、発掘調査の報告と建造物調査の報告を行う。

(1) 発掘調査

当該調査区の発掘調査は、新規建物の建築予定範囲内において南北約7m・東西約7mの調査区を設定し、平成9年10月に実施した。

狹山藩陣屋跡内での通常の発掘調査において、我々が「上層遺構」として認識している近世末期頃までの遺構面は、当該調査区内では地表面に相当する。笠原家住宅が建っていて、笠原家の家族が生活していた生活面は、近世末期から約100年間変わらずに同一面であった。この上層遺構のベース層は、当該調査区の土層断面では褐色灰色砂質土層として認識される。この面から掘り込まれる遺構は、調査区西壁の断面にもみられた。一部の掘り込みは下層遺構面にまで達していた。

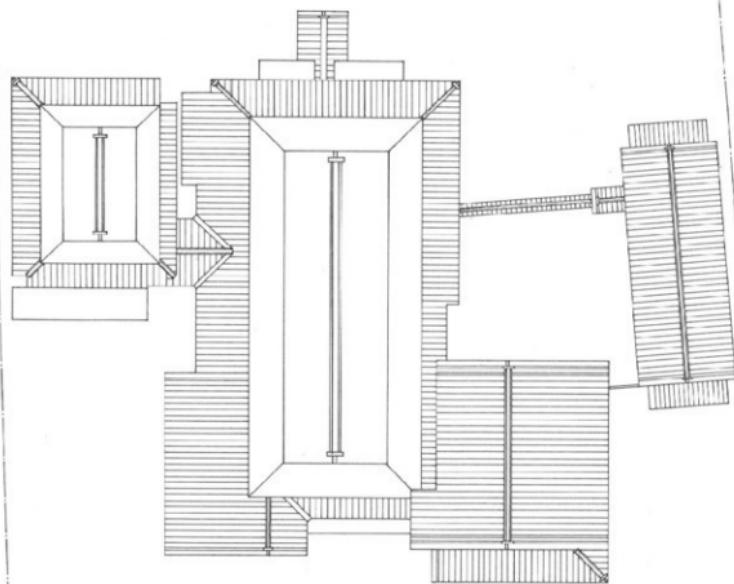
下層遺構面は地表下約80cmの深さにある。下層遺構面で検出した遺構は、ビット17・土坑1・溝状の落ち込み1箇所である。調査区北東端にある土坑埋土から若干の陶器片が出土した。

(1) 建造物調査

97—5区の調査は既存の建物（笠原家住宅）の建て替えにともなうものであったが、笠原家住宅は狹山藩陣屋跡に現存する唯一の近世の建造物であった。そこでこの住宅の解体にともなって建造物の現況を建築史の専門家に依頼し、その実測を行なった。調査は谷直樹氏（大阪市立大学教授・大阪狭山市史編さん委員）の指導のもと植松清志氏（府立西野田工業高校教諭）が実務、製図を担当した。また千森督子氏、京極寛氏をはじめとする多くの人々のご協力を得た。

建造物自体の分析はいまだ途中であり、その詳しい報告はいずれなされることとなるので、ここでは狹山藩陣屋跡に残された最後の近世建造物の実態を図面で示すことにとどめたい。この図面はわれわれが今後狹山陣屋跡で検出する遺構の上部構造を推定する上で貴重な資料となることだろう。

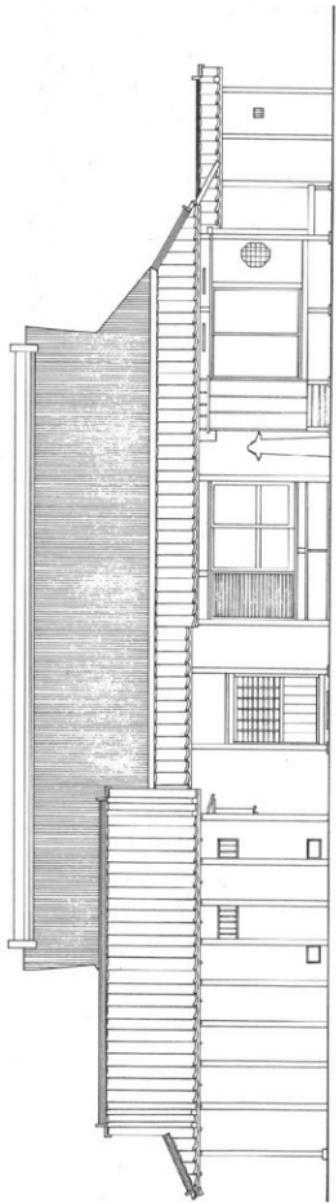
第12図 立原家(住宅)屋根伏せ図



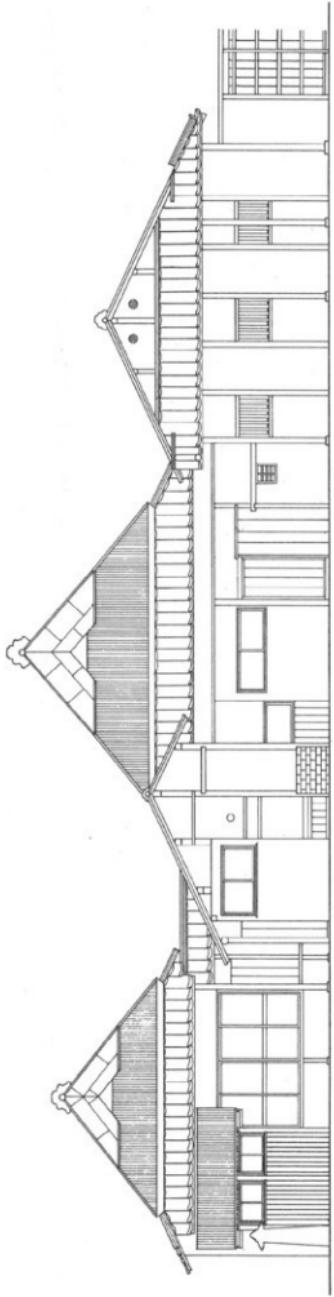


第13図 笠原家住宅間取り図

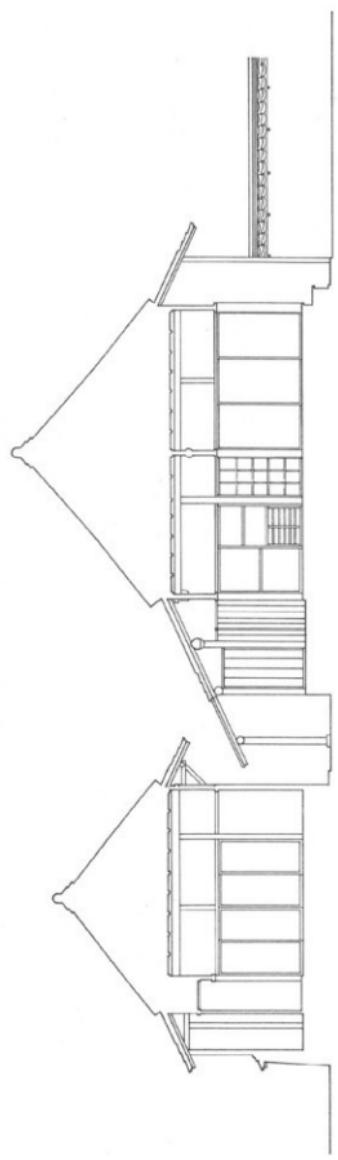
第14図 立原家住宅立面図（正面・東から）



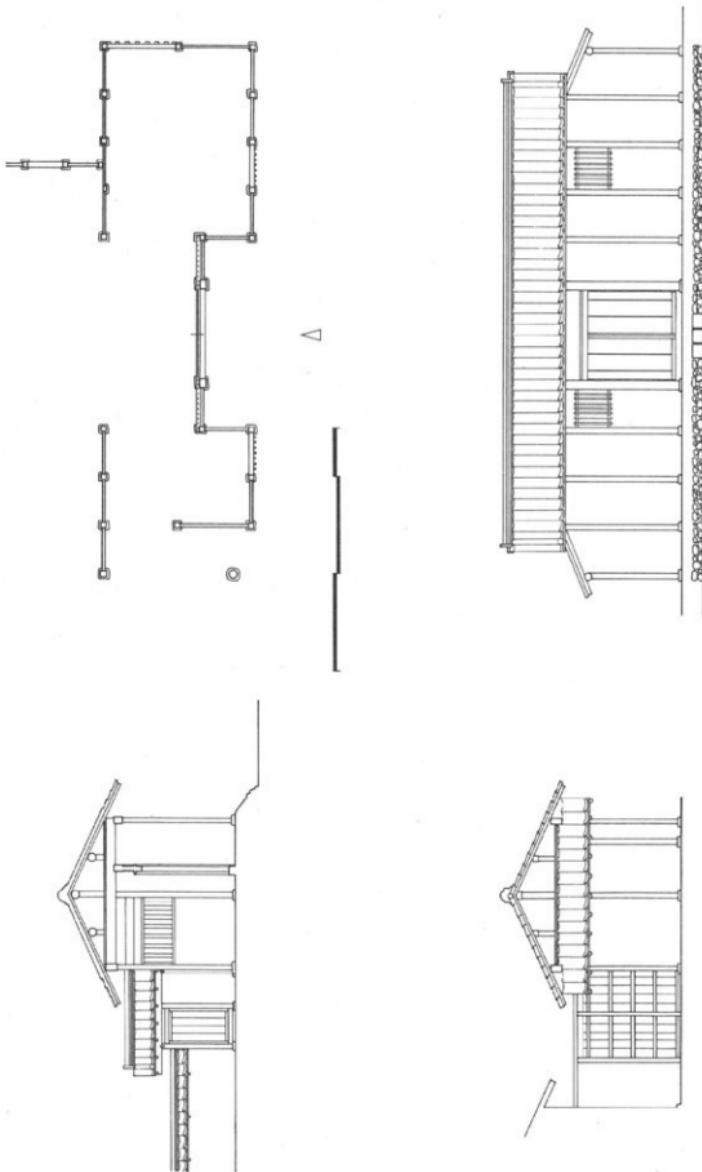
第15図 立原家住宅立面図（南から）

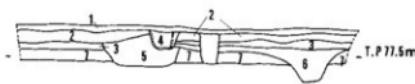
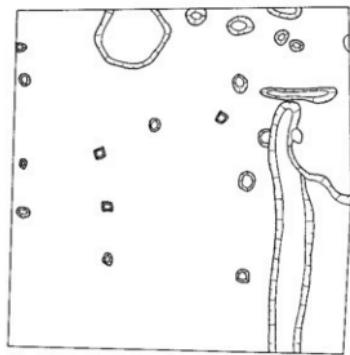


第16図 立原家住宅断面図（東西方向から）



第17図 笠原家住宅長屋門・柱間図・立面図・断面図





- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. 盛土 | 5. 遺構埋土(黒褐色土) |
| 2. 灰褐色砂質土 | 6. 褐灰色砂質土 |
| 3. 黄褐色シルト | 7. 棕色シルト |
| 4. 遺構埋土(黒灰色シルト) | |



第18図 狹山藩陣屋跡97—5区遺構平断面図

狹山藩陣屋跡97—6区

狹山藩陣屋跡97—6区は、大阪狭山市狹山三丁目2515—1、2515—5、2516—2、2517—2、2519—3に所在する。

『狹山藩陣屋跡上屋敷図』では「笠原」家の屋敷地の西側、「坂口」・「松浦」・「植田耕平」の屋敷地およびその西側の道路部分に相当するものと理解されよう。

当該調査区の発掘調査は、開発用地のうち道路予定箇所の約150m²において、平成9年12月に実施した。

(1) 遺構と層序

遺構面は1枚で、地表下60cm～70cmの深さで検出される地山面をベース層としていた。ただし、後世の開発による擾乱が約1m間隔で東西にのびており、これらの多くは遺構面にまで達しており、この擾乱坑を避けて遺構の検出を行うこととなった。規則的な配置のこの擾乱坑は、瓦に使うための粘土取り穴かそれに類したものが想定されよう。

遺構は調査区全域に広がっており、ピット9・土坑8・埋甕5・焼土が検出された。

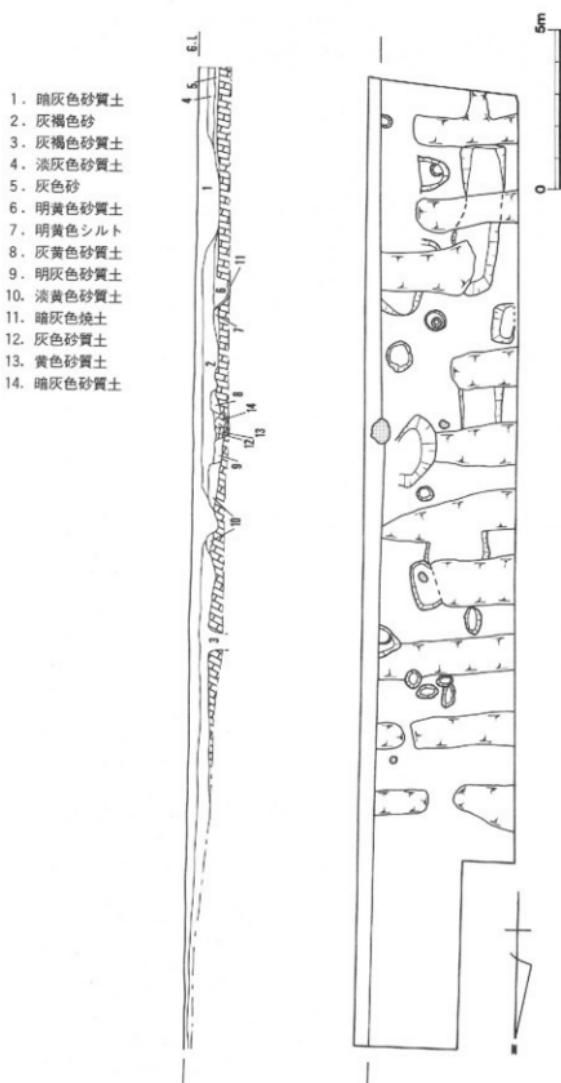
埋甕は東西2m間に2個1組が配置され、これが南北4m～5m間隔で3組配置されていた。おそらく、「坂口」・「松浦」・「植田耕平」の各屋敷の便所やダイドコロに伴うものと考えられる。南東端の甕と中央付近にある甕の内部からは、陶器・瓦片等が出土した。調査区南西端付近で検出された平面が長方形を呈する土坑は480cm×150cmを測り、深さは約40cmを測る。底部ほぼ中央からは陶器鉢と焙烙が重なった状態で出土した。この土坑の北西では、130cm×70cm、深さ約40cmを測る平面が長方形を呈する土坑が検出された。この土坑内の埋土は、赤色の焼土を包含する黒色灰土であった。

(2) 遺物

97—6区は調査面積も広かったために、多くの遺物が出土している。この調査区の遺物は図版27・28・29・30に掲載している。

図版27—1は染付の椀であるが、中国製かと思われる。2は容器の蓋。3は陶製の脚付きの小椀。4～6は肥前系の磁器。4は水差し。5、6は椀。7は陶製の脚付きの小椀。8は土師皿であるが、内面は無色釉がほどこされ、外面はススで真っ黒になっている。9は磁器の小皿。外面は貝文様を施す。紅皿か。10は肥前系磁器の皿。外面は染付で草花文を施す。11は鉄釉を施した陶器の椀。12は摺鉢。産地は丹波か。13も陶器の椀。産地不詳。図版28—14は肥前系磁器の椀。15は陶器の碗であるが、釉薬が相当はがれている。16は土師皿。17は埋瓶としてつかわれていたもので、産地は堺か。図版29—18は土師質の焙烙。19はやはり土師質の火鉢であろう。図版30—20は陶製の片口鉢で、内面および外面の上部にはうすい緑色の釉薬が施されている。

第19図 燐山溝削屋跡97—6区遺構平断面図



報告書抄録

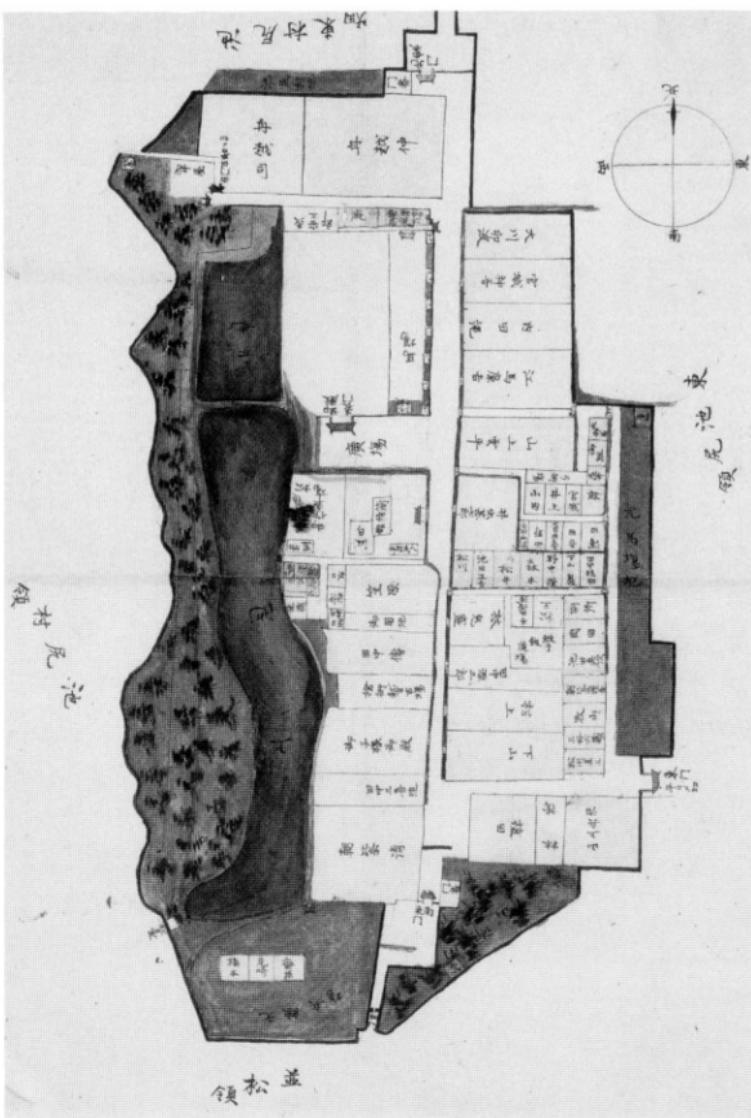
ふりがな 書名	おおさかさやましないいせきぐんはつくつちょうさがいようほうこくしょ 8 大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書 8						
副書名							
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書						
シリーズ番号	16						
編著者名	市川秀之・植田隆司						
編集機関	大阪狭山市教育委員会						
所在地	〒589-0005 大阪府大阪狭山市狭山1丁目2384-1 TEL. 0723-66-0011						
発行年月日	西暦 1996年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 分 秒	東經 度 分 秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
さやまほん 狭山藩 じんやあと 陣屋跡	おおさかさやまほん 大阪府大阪狭山 し さやま 市 狹山	27231	—	34度 30分 15秒	135度 33分 30秒	97-1区 199708 5	個人住宅建設に伴う事前調査
					97-2区 199708~ 199709	63	個人住宅建設に伴う事前調査
					97-3区 199709~ 199710	18	個人住宅建設に伴う事前調査
					97-4区 199709~ 199710	99	
					97-5区 199710	49	個人住宅建設に伴う事前調査
					97-6区 199712	150	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
狭山藩陣 屋跡	城館跡	江戸時代	97-1区/溝:1条 97-2区/V字形大 溝 柱穴:6	97-1区/磁器碗・小皿 焰烙・大鉢 97-2区/陶器碗・磁器 急須・陶器土鍋・土師器 皿土師質瓶・摺鉢・三鱗 紋軒丸瓦			
			97-4区/土坑・溝 97-5区/柱穴:17、 土坑:1、溝状落ち込み	97-4区/土師器皿・塩 焼・壺・青磁皿・磁器碗 ・天目碗・摺鉢 97-5区/陶器片			
			97-6区/柱穴:9、 土坑:8、埋甕:5	97-6区/染め付け碗・ 陶器碗・陶器水差・摺鉢 ・土師器皿・土師器・火 鉢・陶器片口鉢・土師質 甕			

図版

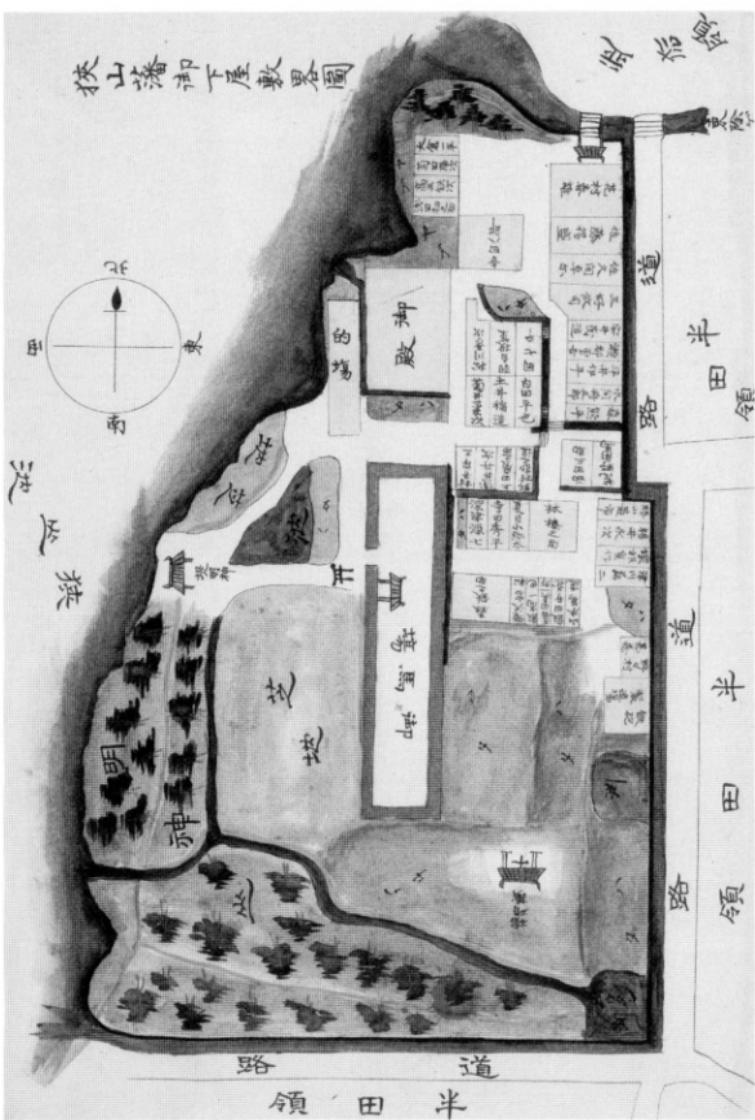
図版1 上空からのぞむ狭山蒸籠屋跡

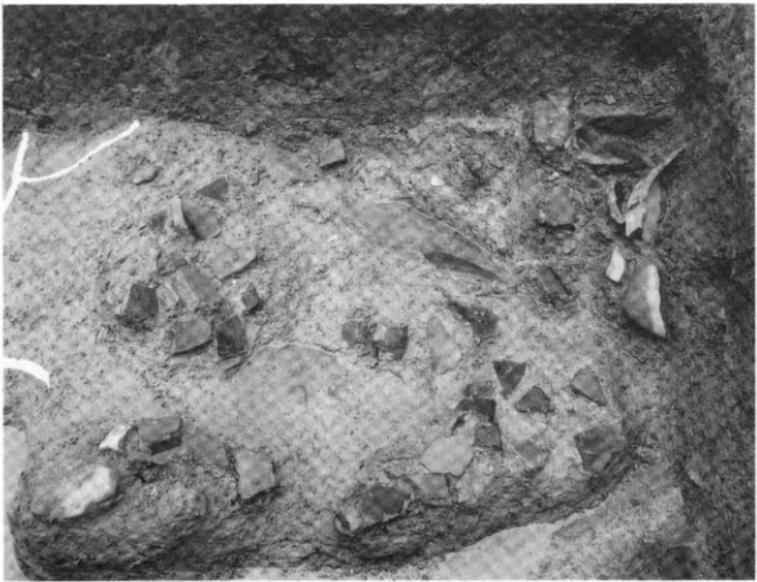


「狹山藩舞屋跡上屋敷図」



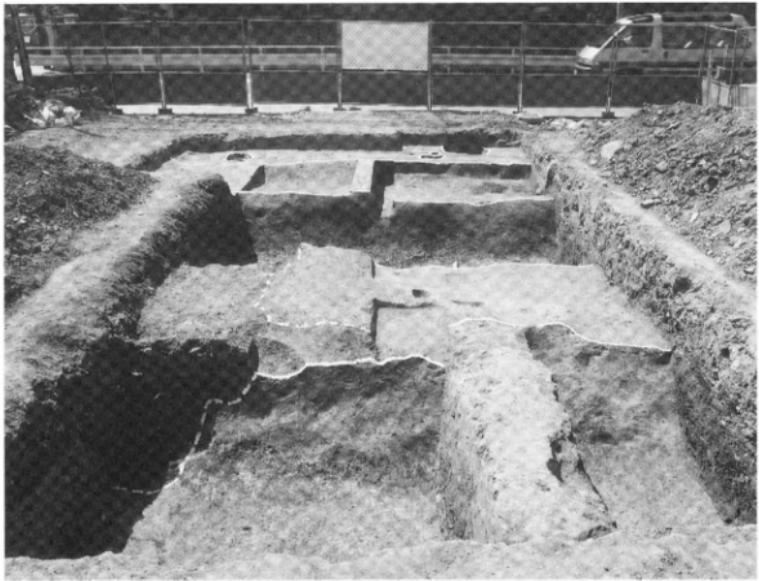
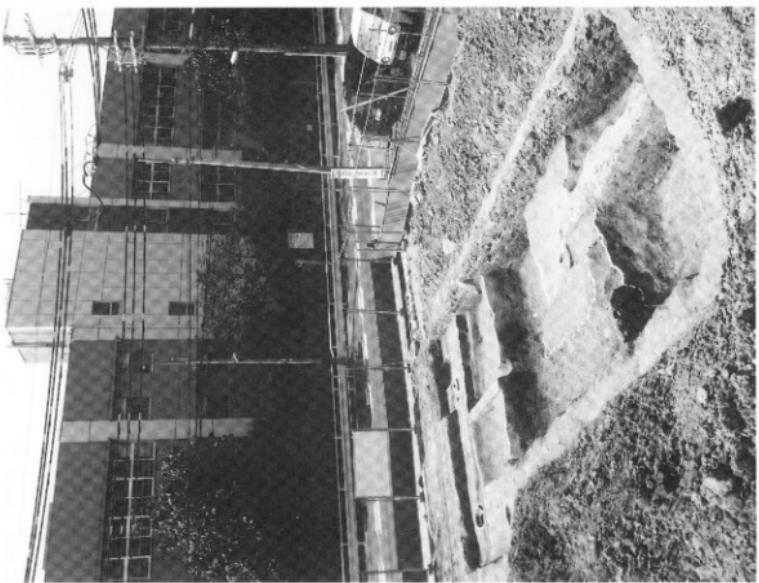
[狹山藩陣屋跡下屋敷圖]



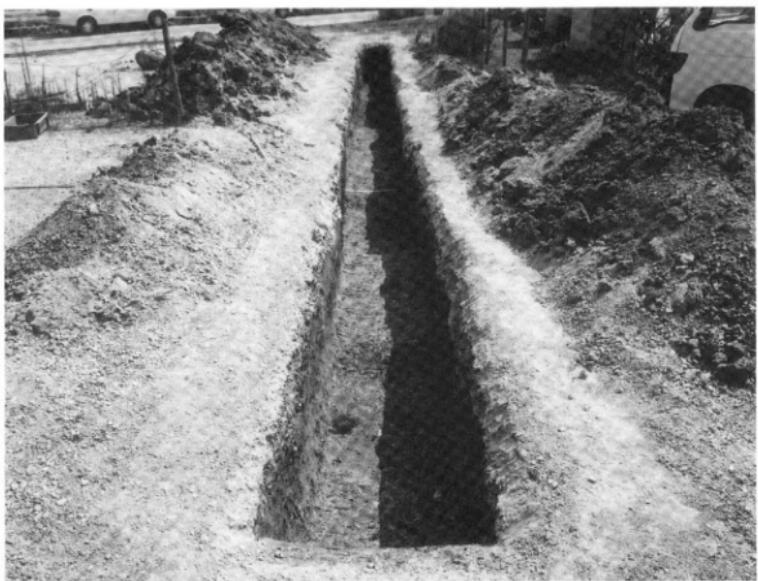


図版5

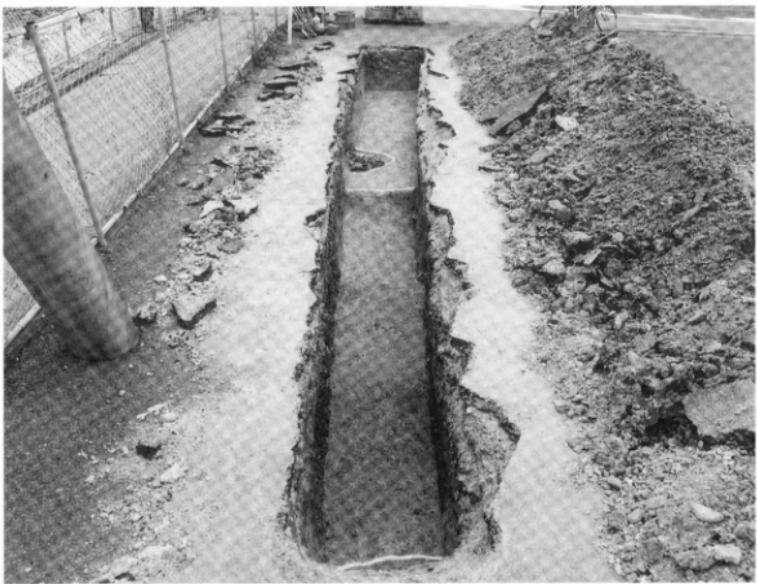
狭山藩陣屋跡97—2区



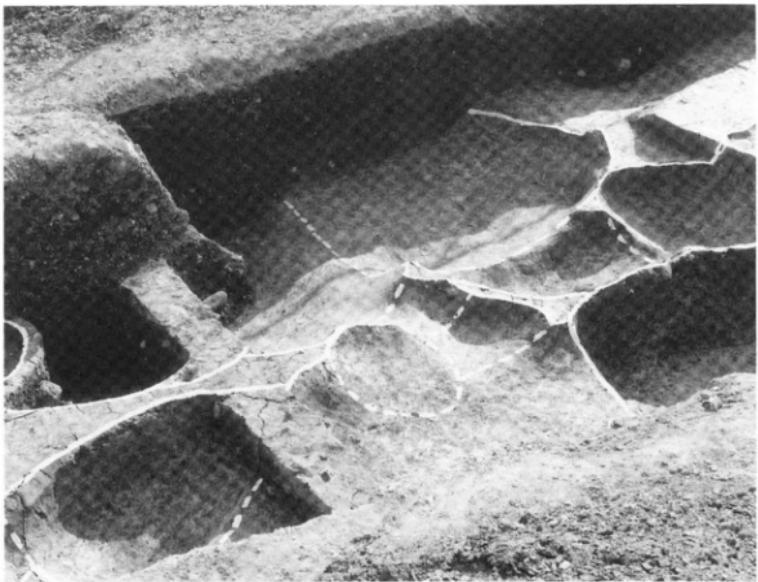
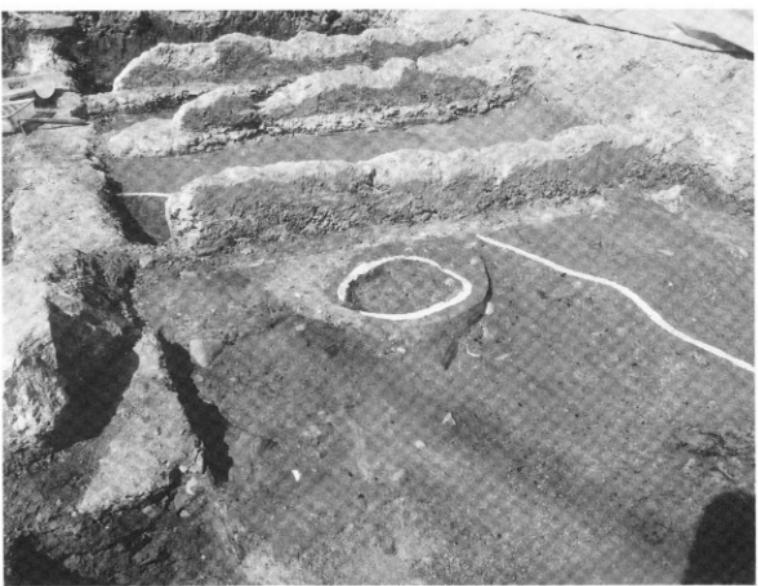




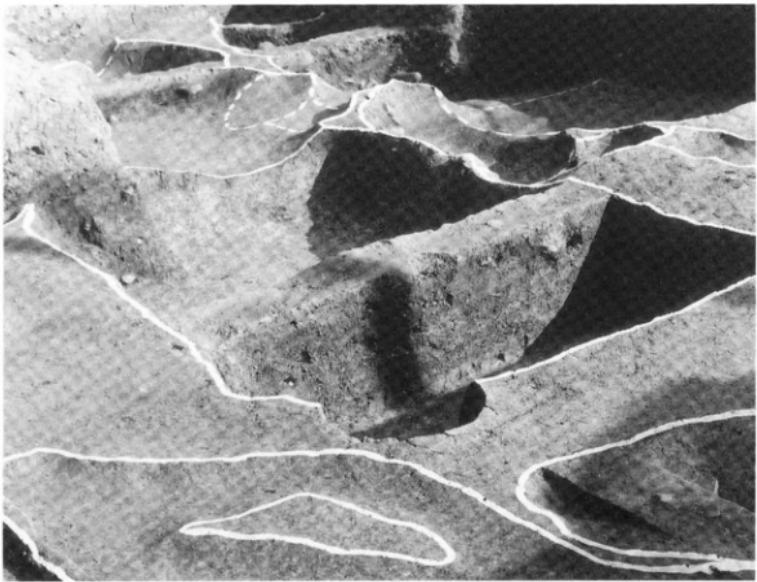
図版 8 狹山藩陣屋跡97—4区試掘



図版9
狭山藩陣屋跡 97—4区



図版10 狹山藩陣屋跡97—4区



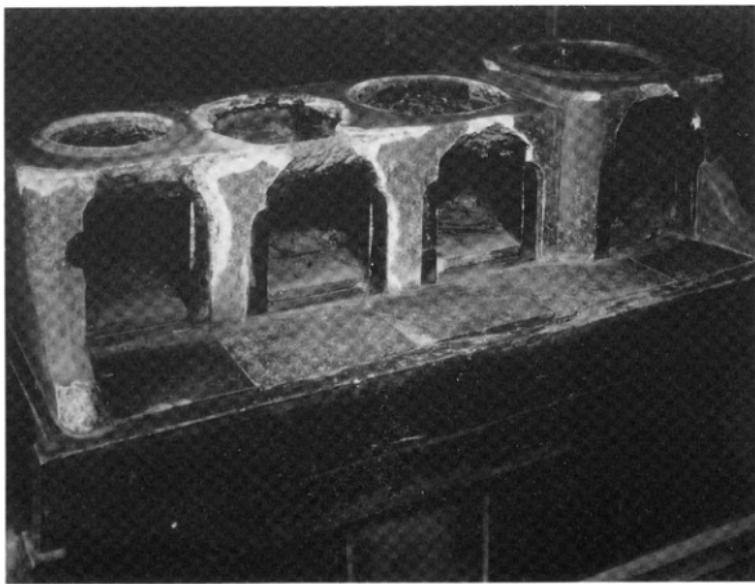
図版 11 狹山藩陣屋跡 97-4 区

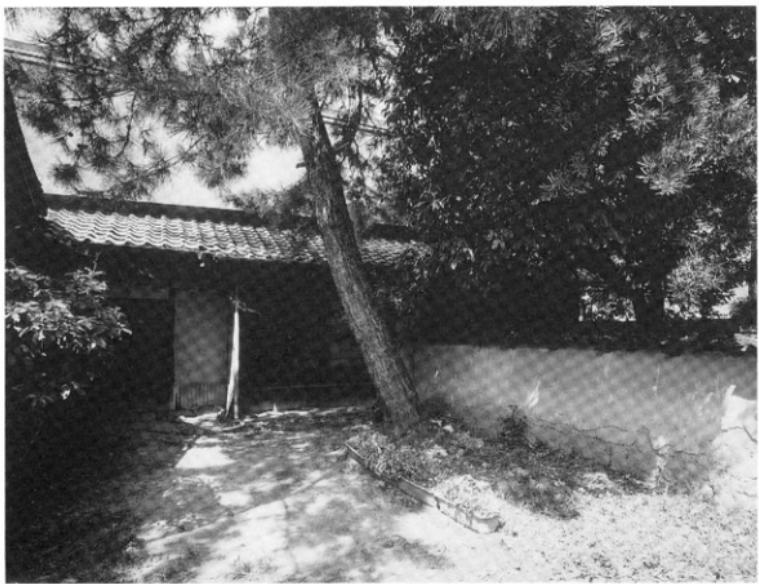


図版12 狹山蒲障屋跡97—5区建造物調査(1)

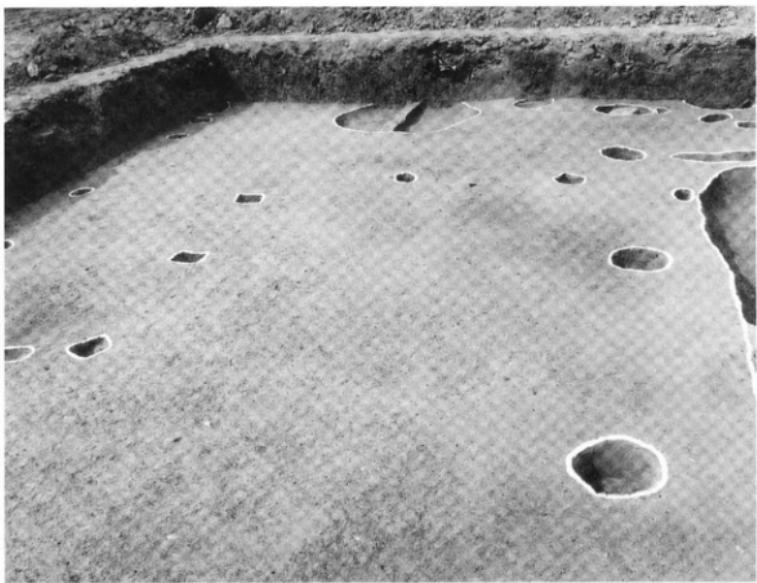


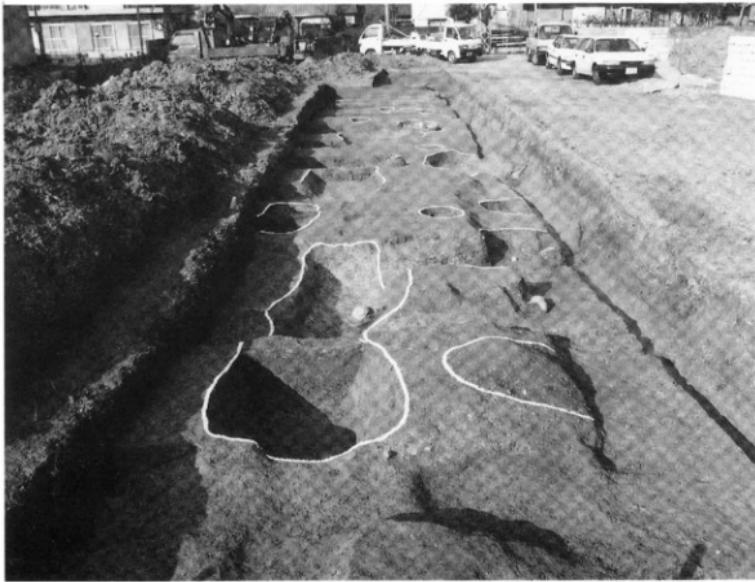
図版 13 狹山藩跡屋跡 97—5 区建造物調査 (2)



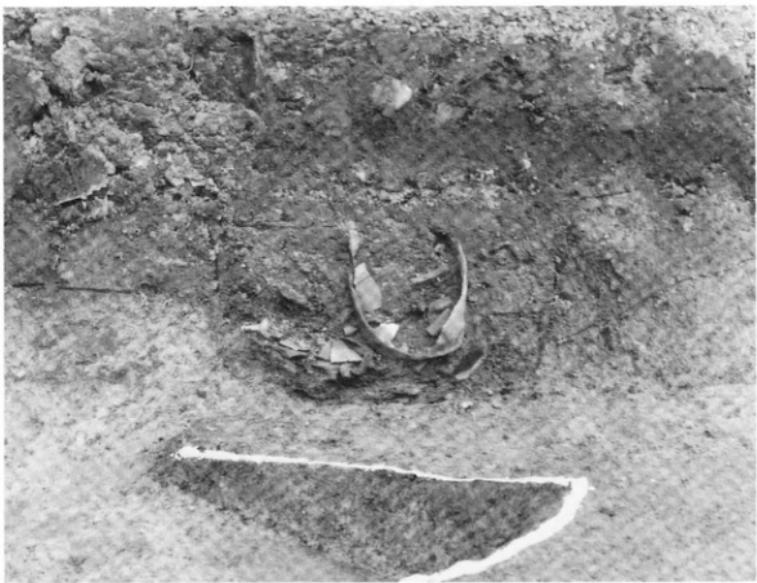
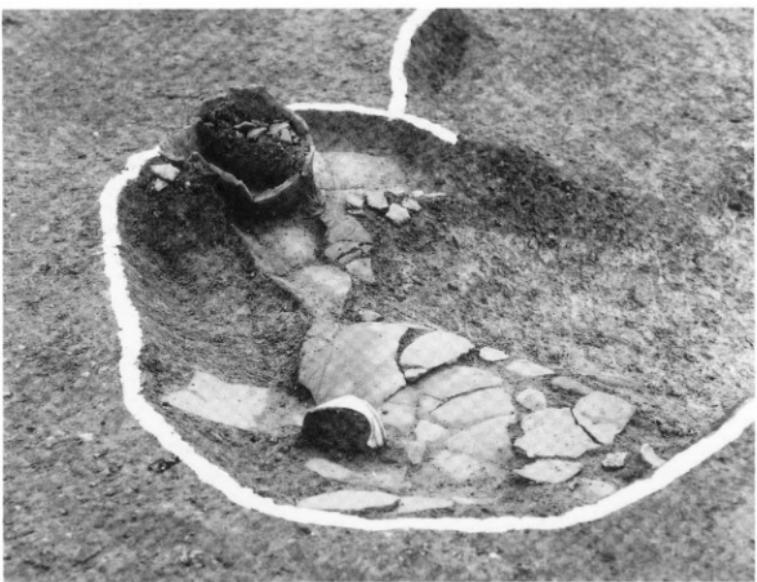


図版15 狹山藩陣屋跡97—5区発掘調査



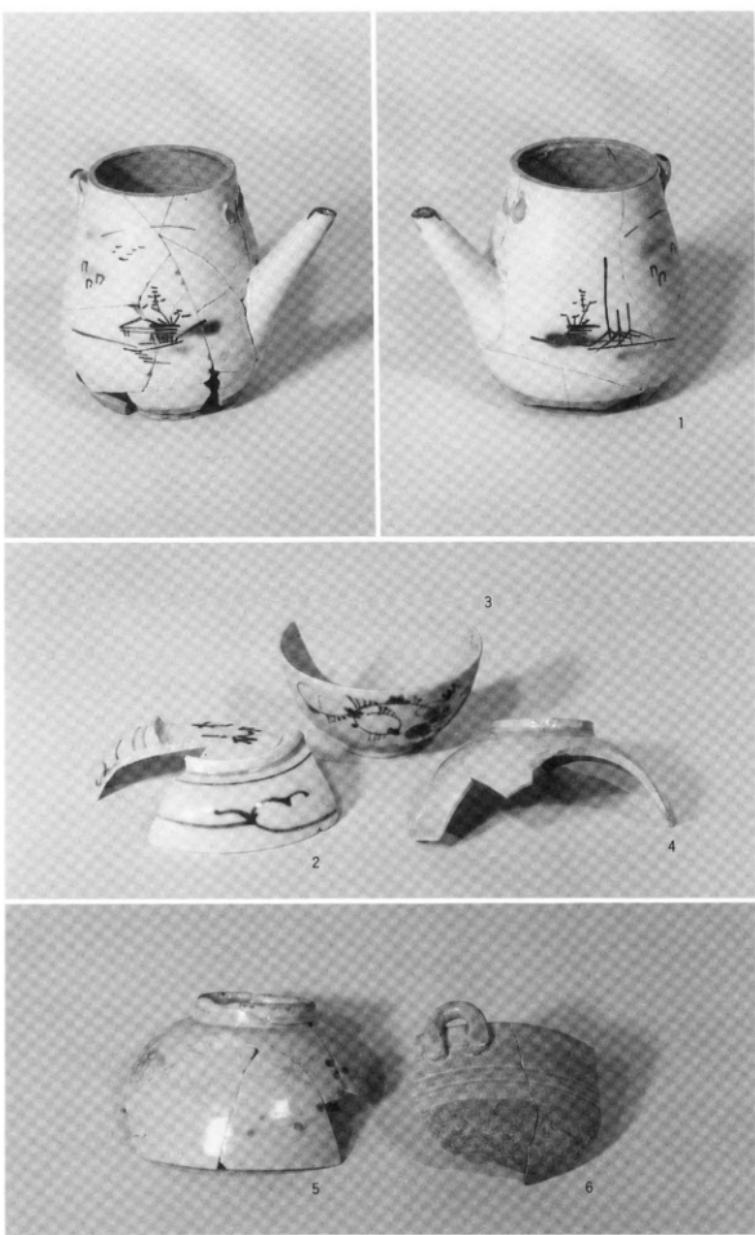


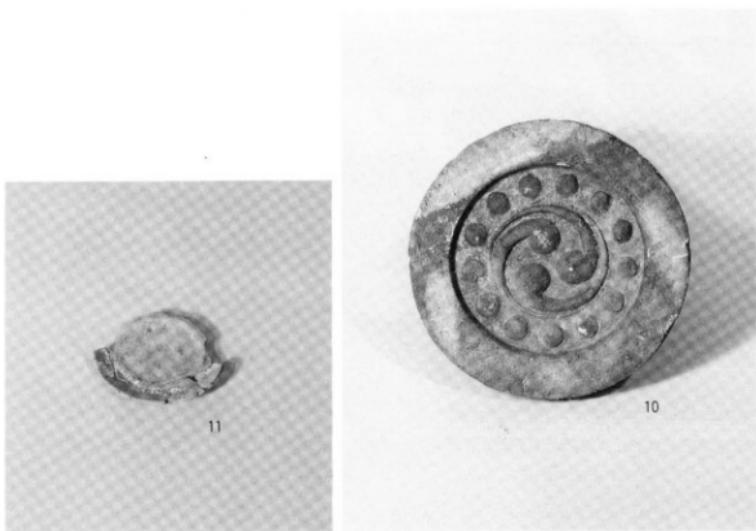
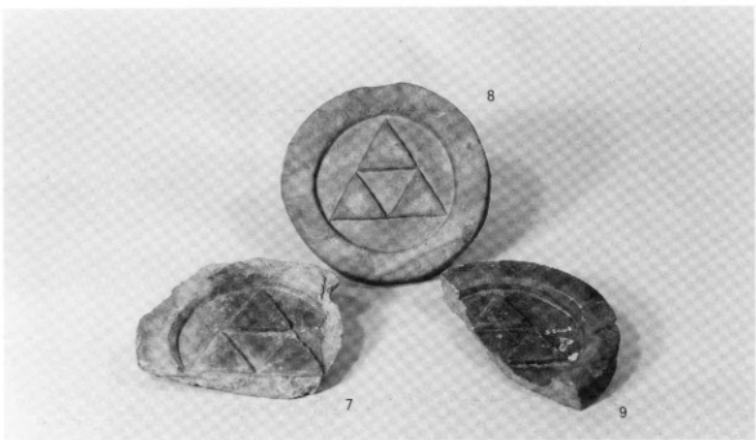




図版 19
狹山藩陣屋跡 97—1区出土遺物（一）

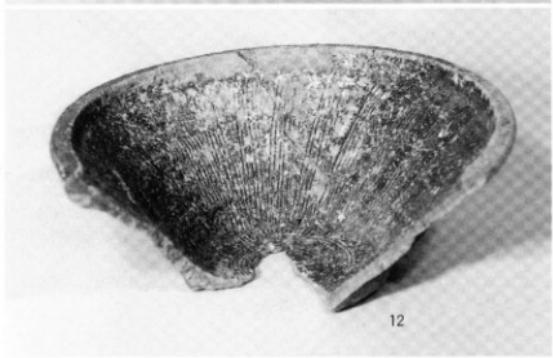




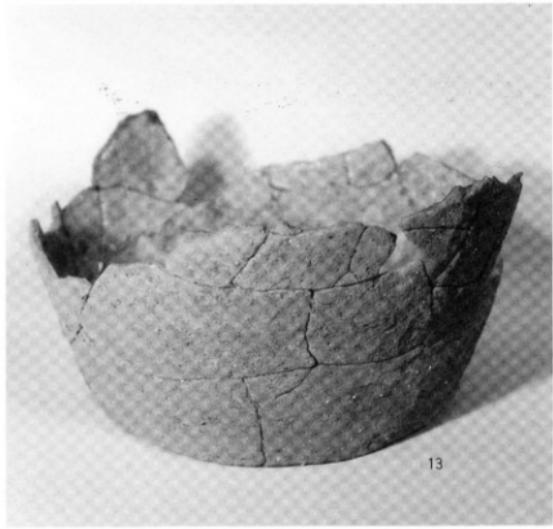




12



12



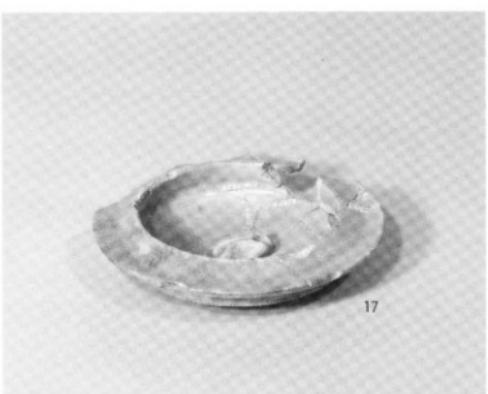
13



1 ~ 5



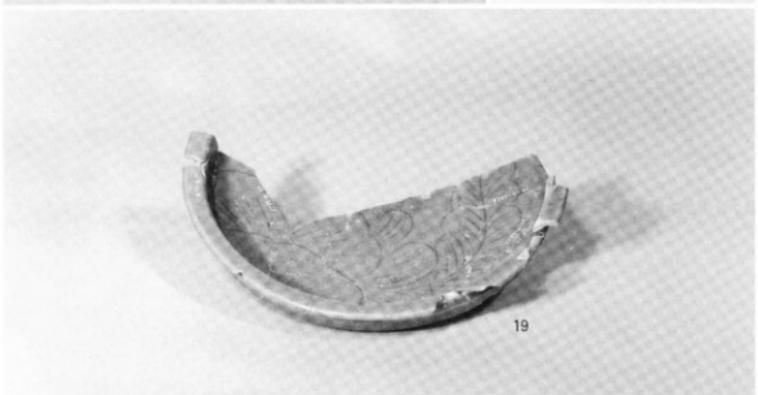
6 ~ 16



17



18

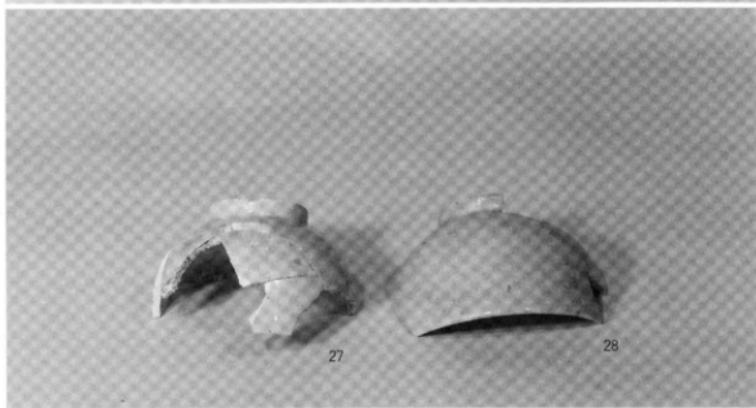
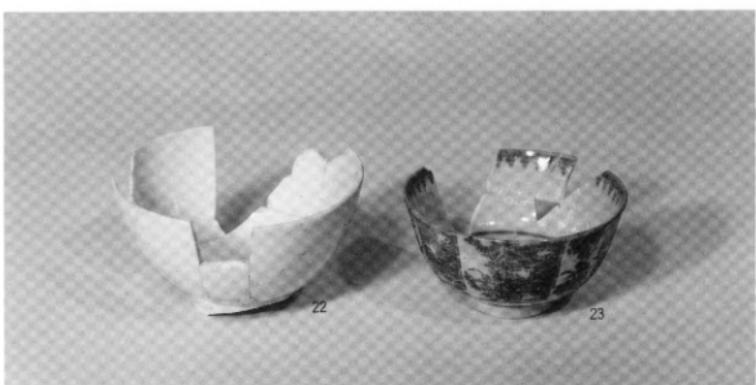


19



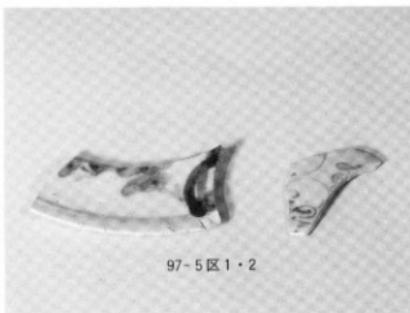
20

21





29



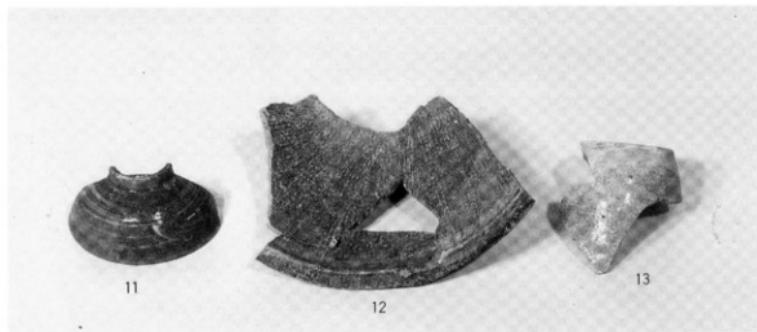
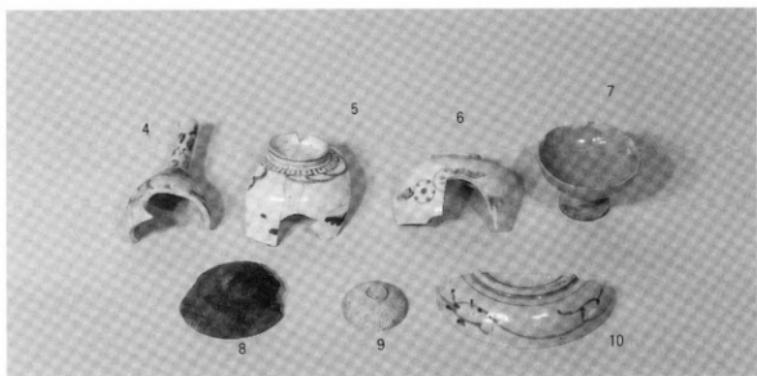
97-5区1・2

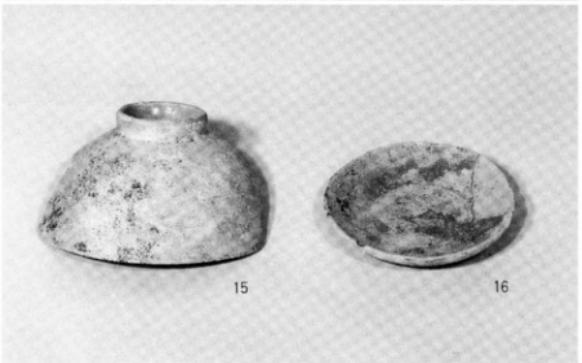


30

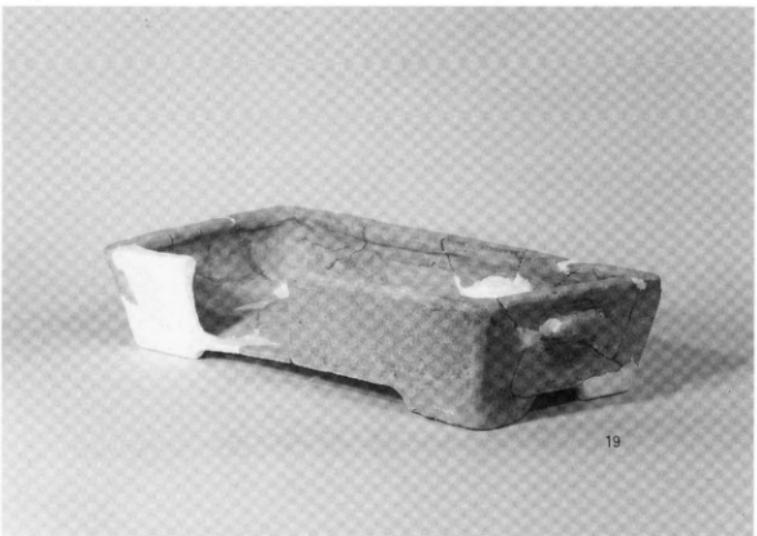
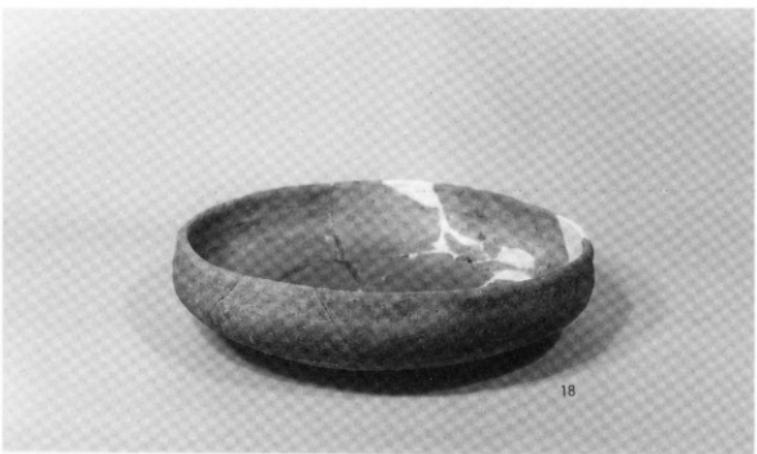


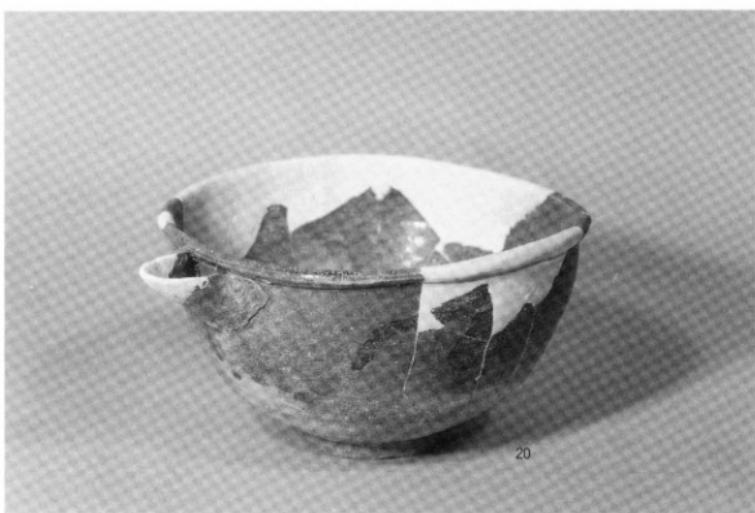
31





图版29 狹山藩障壁跡97—6区出土遺物（三）





20



20

大阪狭山市文化財報告書16

大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書 8

発行日 平成10年3月31日

発 行 大阪狭山市教育委員会

印 刷 橋本印刷株式会社

